

佐賀女子短大
研究紀要
第46集別刷
(2012)

効果的な「社会福祉援助技術演習」の授業導入について

Effective Lesson Introductions to the Class “Social Work Practice”

古川 隆幸

Takayuki FURUKAWA

効果的な「社会福祉援助技術演習」の授業導入について

古 川 隆 幸

Effective Lesson Introductions to the Class “Social Work Practice”

Takayuki FURUKAWA

1. はじめに

平成20年の保育所保育指針改定により、保育所における保護者や、地域への支援の必要性が明確化し、保育士による相談援助が求められるようになった。さらに、保育士養成については、カリキュラム改正によって、平成22年度入学生より大幅なカリキュラムの変更が行われ、筆者が担当している社会福祉援助技術についても、今回の改正で、社会福祉援助技術は相談援助とその名称を変え、さらには保育相談支援という科目が誕生した。

「相談援助」では従来の「社会福祉援助技術」を相談援助の内容に特化し「保育相談支援」においては今まで、社会福祉士等が行ってきた相談援助の方法をベースとし、保育の特色を生かした保護者支援を中心とした内容となっている。このようなことから社会福祉援助技術を理解し、現場での支援に活用できる保育士の必要性は高まっていると思われる。

しかしながら保育士養成課程において、社会福祉援助技術に関する授業時間は他の福祉専門職と比べても少ない状況にあるといえる。例えば、筆者の勤務校である佐賀女子短期大学の例を挙げると、社会福祉援助技術については社会福祉援助技術の授業以外では、社会福祉関連の科目の中でわずかにふれられる程度で、内容の理解が不十分なまま、社会福祉援助技術の授業を受講している学生もいると思われる。このような状態が影響してか、初回の授業の際、社会福祉援助技術について学生に聞くと、「あまり良くわからない。」「何か難しい科目のようである。」といったイメージを持って授業に参加している学生も少なくない。

このように、限られた授業時間数の中で、社会福祉援助技術の授業を効率よく展開していくためには、最初の導入において社会福祉援助技術に対し何か難しい科目のようであるといった苦手意識を払拭させるような取り組みが重要であると考え。さらに受講する学生には社会福祉援助技術について、保育士になるためになぜこの授業を受講しなければならないのか、この授業を受講することによって、自分にどのような技術や知識が備わり、現場でどのように活用することができるのだろうか、といったことを理解して受講に対するモチベーションをあげることが、大切であると思われる。

筆者は、その社会福祉援助技術の初回の授業の導入に他者紹介を利用したアイスブレイキング

(表 1) 社会福祉援助技術の教科目の教授内容

【保育の本質・目的の理解に関する科目】	
〈科目名〉 社会福祉援助技術（演習・2単位）	
〈目標〉 1. 保育実践にとって必要な社会福祉援助技術の概要と歴史を理解させる。 2. 社会福祉援助技術の方法及び内容について理解させる。 3. 人権の尊重、自立支援、秘密保持等の基本姿勢について理解させる。 4. 保育士の職務として活用する機会の多い個別及び集団援助技術を事例を用いた演習形態で学び、またコミュニティワーク、ケアマネジメントについても理解させる。	
〈内 容〉 1. 保育と社会福祉援助技術 (1) 社会福祉援助技術の意味 (2) 社会福祉援助技術の方法 (3) 保育と社会福祉援助技術の関係 2. 社会福祉援助技術の発展過程 3. 個別援助技術（ケースワーク） (1) 個別援助技術の意義と機能 (2) 個別援助技術の構成要素 (3) 個別援助技術の原則 (4) 個別援助技術の展開過程 (5) 面接、記録、評価 (6) 保育場面と個別援助技術の実際 4. 集団援助技術（グループワーク） (1) 集団援助技術の意義と機能 (2) 集団援助技術の援助媒体 (3) 集団援助技術の展開過程 (4) 保育場面と集団援助技術の実際 5. 地域援助技術（コミュニティワーク） (1) 地域援助技術の意義と機能 (2) 地域援助技術の基本的性格 (3) 地域援助技術の具体的実践例 6. ケアマネジメント 7. 事例研究（演習） (1) 保育所における児童・家族への援助 (2) 保育所以外の児童福祉施設における児童・家族への援助	

※教授に当たっては、導入時期においては講義形式で授業を行うことは差し支えないが、全体としては演習的展開とすること。

※指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（平成15年）。様式については筆者により変更している。

を行っている。今回は、この授業の実施内容の報告と振り返りを行うことにより、効果的な社会福祉援助技術の授業の導入方法について検討を行っていきたい。

2. 社会福祉援助技術のシラバス作成

社会福祉援助技術のカリキュラムについては、国家資格である保育士を養成するという目的があるため、厚生労働省によって、カリキュラムの内容が示される。それをもとに、担当教員が、シラバスを作成し、実際の演習を展開していくことになる。（表1）は厚生労働省雇用機会均等・児童家庭局長より平成15年に出された、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」で記載されている社会福祉援助技術の教科目の教授内容である。

教授内容を見ると個別援助、集団援助、地域援助といった援助の概要の理解から、援助技術の歴史の理解までと幅広い内容を扱うのだが、他の福祉専門職である社会福祉士などと比べると、

効果的な「社会福祉援助技術演習」の授業導入について（古川隆幸）

（表２）社会福祉援助技術シラバス

科目名	社会福祉援助技術	担当 教員	古川 隆幸	対 象	こども学専攻
				開講期	2年 後期
				単位数	2単位
授業の到達 目標	この演習では、保育実践にとって必要な社会福祉援助技術を理解することを目標にする。また、この演習を行うことで、保育者となる自分自身について深く考えてもらいたい。				
授業の概要	演習形態で学ぶことを中心に進めていく。時間終了時にミニレポートの提出を行わせる。				
授 業 計 画					
1	社会福祉援助技術の理解①アイスブレイキング演習	16	地域福祉援助技術 調査①		
2	社会福祉援助技術の理解②個別・集団・地域援助技術	17	地域福祉援助技術 調査②		
3	社会福祉援助技術の理解③記録、評価	18	地域福祉援助技術 調査のまとめ①		
4	保育と社会福祉援助技術との関係（事例研究）	19	地域福祉援助技術 調査のまとめ②		
5	保育と社会福祉援助技術との関係（事例研究）	20	地域福祉援助技術 プレゼンテーション①		
6	エゴグラム演習	21	地域福祉援助技術 プレゼンテーション②		
7	ジェノグラム演習「繋がり」の再確認	22	KJ 法の作成の技術①		
8	ライフヒストリー演習	23	KJ 法の作成の技術②		
9	自己理解と他者理解「若い旅人の物語」	24	KJ 法とプレゼンテーション①		
10	価値と倫理「自分流援助の危険」	25	KJ 法とプレゼンテーション②		
11	価値と倫理「地球が減る前に」	26	面接技法①		
12	他者理解・疑似体験 障害者体験①	27	面接技法②		
13	他者理解・疑似体験 障害者体験②	28	コミュニケーション技法①		
14	他者理解・福祉的視点から環境について考える①	29	コミュニケーション技法②		
15	他者理解・福祉的視点から環境について考える②	30	まとめ		
評価方法 (基準)	出席状況、授業態度、レポート、期末試験の総合評価とする。				
教科書 参考書	「新社会福祉援助技術演習」社会福祉教育方法・教材開発研究会編集（中央法規）				
メッセージ	お互いに楽しみながらも、真剣に取り組みましょう。				

社会福祉援助技術に割り当てられている時間数はかなり少ない。そのため授業時間数や、演習を多用した展開内容から考えると浅く広くといった感じが否めない内容となっている。

そのため、一回の演習を通して、援助技術で習得していかなければならない知識や技術との関連性を示しながら演習を展開していく必要がある。また、援助の概要や、援助技術の歴史的展開については社会福祉等の関連科目で教授される内容と一致するところもあり、社会福祉援助技術を教授する場合、そういった関連科目との関係性も考えながら展開していく必要性もあった。

以上の点を踏まえながら、筆者はこれをもとに、授業を行うシラバスを作成した。そのシラバスの内容は（表２）のとおりである。

このシラバスを作成した際は、先に述べたとおり、教授しなければならない内容に関して時間

の制約があることから、一回の演習を通して、多くの内容との関連性を示せるような内容にすることに留意した。

ちなみに、筆者の勤務校である佐賀女子短期大学では、社会福祉援助技術は半期30コマ、2コマ連続の演習形式で開講している。

また、援助の概要や、援助技術の歴史的展開については社会福祉等の関連科目で教授される内容と重複しているところもあり、そのような内容に関しては、演習のまとめを行う際に振り返る程度にとどめることとし、シラバスを作成した。

演習終了時には、10分程度の時間を使い、ミニレポートの提出を行わせている。このレポートは、次回演習時に、数人のレポートを名前を伏せた形で紹介を行っている。そうすることで、前回行った演習の振り返りや、自分以外のメンバーの意見を聞く貴重な時間となっている。

3. 他者紹介を利用した社会福祉援助技術の導入について

(1) 社会福祉援助技術の導入プログラム作成で留意した点

上述したように、援助技術の授業時間は限られているため、一度に多くの内容を盛り込んだ演習内容にする必要があった。

そのため、初回の授業については以下のようなことに留意して授業のプログラムを計画した。

- ① 社会福祉援助技術と、今まで学んできた関連科目との関連性について知る。
- ② これから自分たちが行っていく演習の概要について知る。
- ③ 学生が演習への参加意識を持ち、積極的に授業に参加してもらえるようにする雰囲気をつくる。
- ④ 授業を円滑に進めていくためのルールを知る。

以上の4点に留意して演習のプログラムを計画した。①については後述しているが1年次に学んだ社会福祉援助技術を実際に演習として行っていく際に事前に知っておいてほしい知識を習得しているかの確認にもなる。②は演習の内容は多岐に渡っており、事前に自分たちが行う演習の内容を知ること、それぞれの演習の内容が関連性を持っていることを認識する手助けとなる。③についてはこの科目の性格上、その時間のほとんどは学生たちが実際に動く演習の時間となっている。そのため、学生のモチベーションを高くし、それを維持していくことが重要である。そのために初回の演習で授業に対する興味や関心を持ってもらえる内容にすることが大切だと考えた。最後に④であるが、相談援助の基本はまず相手の話を聞くことであると私は考えている。そのため、教員の話や、発表をしているメンバーの話をきちんと聞くことを徹底させた。また、シラバスを見てもわかるように、グループで行う演習を多く取り入れていること、さらにはその演習が1回で完結せず2～3回と連続して行う演習もあるため、欠席や遅刻があるとグループワークについていけない恐れがあり、遅刻や欠席などについても指示を行っている。

(2) 社会福祉援助技術の初回授業の内容と実施

1) オリエンテーションと1年次に学習した社会福祉援助技術についての復習

最初の授業であるので、オリエンテーションとして最初に受講のルールの説明を行う。授業形態で演習を中心として行う場合は、演習を実施していく際に、ある程度学生の自主性にゆだね演習を進行するため、私語をする学生や授業とは関係のないことを行う学生もあり、注意は必ず行うようにしている。また、評価についても、演習終了後に提出させるレポートや、提出物によって評価を総合的に行うことを説明し、演習については手が抜けないというイメージを学生が持つように話すことを心がけている。

次に、1年次に学習した社会福祉援助技術についての振り返りを行う。なぜ保育士が社会福祉援助技術を学ぶ必要があるのか、どのような場面で、社会福祉援助技術の考え方をを用いて保育を行っていくのか。また、実際に今から学んでいく社会福祉援助技術の主要な範囲である個別援助技術（ケースワーク）、集団援助技術（グループワーク）、地域援助技術（コミュニティワーク）についての振り返りを学生がイメージしやすいように保育現場の事例を題材にした説明を行った。このあたりの内容についてはすでに社会福祉の授業で、大まかなことは学んでいるが、学生の理解度は様々である。最初の段階でここをしっかりと説明しておかないと、「何のためにこの授業を受けているのか」といった授業の目的や、到達目標があいまいになってしまう恐れがあるため、しっかりと説明を行う必要がある。

本来は社会福祉援助技術の分類はさらに詳細に分けられているが、授業では学生が援助の対象としてイメージしやすいようにあえて個別、集団、地域の3つに重点を絞って説明を行っている。

2) 他者紹介を利用したアイスブレイキングの実施

オリエンテーションと大まかな援助技術についての説明が終了した段階で、アイスブレイキング演習に移行する。この演習では他者紹介を行うことでアイスブレイキングを行った。他者紹介は自己紹介とは異なり、自分のパートナーのことを紹介する方法である。

なぜ自己紹介ではなく他者紹介を選択したかという点、自己紹介では、恥ずかしさや、すでに周囲の学生は自分のことを知っているという思いから、自分の紹介を簡単に行ってしまう傾向がある。しかしながら、他者紹介の場合には、相手の紹介を行うため、しっかりと相手の情報を聞き出す必要がある。さらに、聞き取りを行った後に相手をアピールする内容を考えなければならず、必然的に熱心に相手との会話を行うことになり、学生の参加意識が高まることが期待された。

また、他者紹介の選択については、アイスブレイキング終了時に行う援助の過程の説明を行う際に、他者紹介の経験をもとにその説明を行う意図もあり、この方法を選択している。これについては後ほど述べていく。

では実際に行った演習について以下で説明していきたい。

①他者紹介を利用したアイスブレイキングの手順の説明と実施

最初に、授業担当者からアイスブレイキングの意味について解説をし、その方法として他者紹

介を行うことを説明する。その後実際に他者紹介を行っていく。

②他者紹介の実施

演習では、学生が演習に入りやすいように学生の自主性に任せてパートナーを決定させている。今回は、他者紹介を行うため、パートナー間でお互いの自己紹介や聞き取りを行う。聞き取りは一人10分程度で行った。

演習を実施するクラスは、初めて顔をあわせるクラスではなく、1年次にすでに一緒に授業を行っているクラスであるので、クラスのメンバーの基本的な情報はすでにメンバー内では織り込み済みである。また、パートナーも自分たちで選んでよいから、学生にはパートナーに対してあらかじめ予備知識がある状態であり、比較的深いところまで話を聞き取ることが可能である。そのため、発表については、自分のパートナーをアピールする内容になるように意識して聞き取りを行うことを指示している。

お互いの聞き取りが終わったあとで、紹介する内容をまとめる。その際に自分が発表をしたいと考えている内容について、パートナーに承諾を得る作業も同時に行う。

③紹介時のルールについて説明を行う。

パートナー間で発表の内容について確認することができたら、次に他者紹介時のルールの説明を行う。ルールについては以下の3つである。

- ・発表者は聞いている人にわかりやすい声で話すこと。
- ・紹介される側はうつむかない。紹介する側も用意したメモの棒読みをせず、聞いている人たちを見ながら話すこと。
- ・聞いている人たちは、発表者を無視することになるため、私語や他の作業はしないこと。

発表時のルールについては比較的シンプルな内容にとどめているが、発表者も聞く側も、このルールを徹底させ、ルールが守れない場合は、発表の途中でもその都度注意をしている。このルールの設定は、後の演習で行うプレゼンテーション技法の演習の導入も兼ねている。また、最初の授業でこのルールを徹底させることにより、後の授業でもこの3つのルールが比較的守れるようになっている。

④発表の実施

学生が行う他者紹介は、発表の順番のみこちらから指示を行うが、特に紹介の方法や持ち時間についてはこちらから指示は行わず、学生の自主性に任せ紹介を行わせた。

しかし、自主性に任せるといっても、指導者が介入を行わなければならない点もある。特に注意する点は最初に紹介を行うグループの発表やそれを聞くクラスの雰囲気、良くも悪くもそれに続くグループの発表にも影響しやすいという点である。

例えば、メンバーのなかにはどうしても話すことが苦手な学生もあり、最初のグループが非常にシンプル（ここでは聞く側が物足りないと感じるという意味である。）に紹介を行うと次に続くグループもそれと同様にシンプルな発表を行ってしまうことが多かった。また、聞く側の態度についてもクラス全体の聞こうとする雰囲気が出来上がらず、集中していない状態のまま発表が行われると、最後までその雰囲気が継続してしまう恐れがある。実際に演習を行った際にも、そのような傾向が見受けられることがあった。そのため、最初のグループの紹介のときは時間をかけて聞く側の準備が整うのを待ち、指導者の指示で他者紹介をスタートさせた。さらに発表がシンプルな場合にはこちらから追加の質問を行うなどの介入を行った。

この介入を最初の段階から行うことで、学生の感想からは、「最初は簡単に考えていたが紹介する側は指導者や、クラスのメンバーが印象に残る紹介にするにはどのように話せばいいのか、きちんと聞いてくれているメンバーにさらによい発表を行うためにはどうすればいいのか、自分が準備段階のときに考えていた発表の方法は適切だろうか、ということを発表を待っている時間でも考えた。」という意識の変化を感じさせる趣旨の感想を多数見ることができた。

⑤終了とまとめ

すべてのメンバーの紹介が終了したら、指導者による全体的な講評を行い、さらに、他者紹介を行う準備段階で行った聞き取りや、確認作業などの一連の流れを例に、1年次学んだ個別援助技術の援助課程と照らし合わせる作業を行った。

援助課程として取り上げたのは、i. インテーク、ii. アセスメント、iii. プランニング、iv. インターベンション、v. エバリュエーションという代表的と思われる援助課程である。以下、援助の過程と、学生が他者紹介を行った際に実際にとった行動との関連を説明していきたい。

i. インテーク

インテークとは、援助の対象者と出会い、信頼関係を築く段階である。この演習ではパートナーと出会い、パートナーを紹介するという共通した目標に向かい、これから行っていく作業についてお互いの理解を深めたことがこれにあたる。

今回の演習ではすでに、パートナーとの関係が出来ているグループが多かったため、雰囲気を作ることが比較的容易だったこと、初対面同士がグループを作る際にはインテークの難易度が上がることなどを説明した。

ii. アセスメント

アセスメントとは事前評価やそのための情報収集を行うことを意味する。

他者紹介をするという目的を達成するためには、互いの情報を収集することが必要になる。今回の演習ではお互いの聞き取り調査を行ったことがこれにあたる。人によってはきちんとメモを取りながら情報を聞く人、メモを取らずに話をする人もいた。情報の正確さを求めるならば、メモを取ったり、会話内容を録音したりすることが必要なことなどを説明した。

今回のグループの場合、すでに基礎的な情報は他のメンバーも知っていることが考えられるので、さらに踏み込んだ情報収集を行うために、今回は他のメンバーが知らないパートナーの一面を紹介することや、自分のパートナーのよいところをアピールできるような紹介をすることを条件としてつけることで難易度を上げたことを説明した。

iii. プランニング

プランニングとは解決目標、解決方法、取り組みの期間の設定といった支援計画の作成を行うことである。

この演習ではお互いに聞き出した情報を、どのように発表するかを考え、発表の計画を立てた作業がこれにあたる。ただし、この授業の構成メンバーは先ほど述べたように、すでに同じクラスとして、1年間生活をしているキャリアがあるため、メンバーは、有効なアピールをするために、他のメンバーの関心を引くためにはどのような情報がよいのか、また、どのような発表の仕方がよいのかを、工夫を行っていた。

また、聞き取った内容には、パートナーには話したが、他のメンバーには話してほしくない内容も含まれている恐れがある。その内容が公表されることを防ぐために、演習時にもパートナーに対して内容の確認を行わせたことを説明した。また、この説明をする際に保育士が援助過程に入手する情報の取り扱いについても説明を行うことで、情報の取り扱いの重要性を説明した。

iv. インターベンション

インターベンションはプランニングで立てた計画を実施する段階である。今回の演習ではグループごとの他者紹介がこれにあたる。

他者紹介の実施方法の詳細は前述したとおりであるが、今回演習を実施したクラスは、初めて集まるクラスではなく、1年次にすでに一緒に授業を行っているクラスであること、また、パートナー決めも自分たちで選んでよいため、比較的、和んだ雰囲気であったことを説明、実際に知らない人同士の他者紹介を行う場合はその難易度が上がることを考えておかなければならないことなどを伝えている。

v. エバリュエーション

エバリュエーションとはインターベンションで実施した援助の事後評価や、成果の確認を行う段階である。今回の演習では他者紹介の振り返りがこれにあたる。

今回の演習では、発表後の講評や演習終了後のレポートをエバリュエーションとしていることを説明、さらに実際の援助過程では、エバリュエーションの段階で問題の解決が見られない場合は、またアセスメントから援助過程を繰り返す必要性があることなども説明している。今回の演習では実際には行っていないが、しっかりした他者紹介ができなかった（紹介された側が不満に感じたなど、もう一度発表をやり直す必要性が生じた）場合にもう一度情報を収集しなおし、発表の計画を立て、発表を行うことがそれにあたることを説明している。

効果的な「社会福祉援助技術演習」の授業導入について（古川隆幸）

援助過程について学ぶ場合、学生の段階で実際の保育現場での経験を通して学ぶことは、困難であるため、事例を使い説明や演習を行うことが多いが、実際に体験をしているわけではないため、援助過程をイメージしてもらうことが難しいという思いがあった。そこで、他者紹介を一つの例とした援助過程の説明を行い、イメージを持ってもらうことで、1年次に学習した内容の復習を行うとともに、後の授業で行う事例検討などをスムーズに行うことができるのではないかと考えている。

4. おわりに

今回は、社会福祉援助技術の授業を行う際に効果的な導入方法を検討するという目的で、他者紹介を利用したアイスブレイキングを演習に導入する試みを行い、その実施報告と振り返りを行った。

演習終了時には、10分程度の時間を使いミニレポートの提出を行わせ、次の演習時に、名前を伏せた形で、数人の学生のレポートの紹介を行っている。

初回の演習を行った際、実際に書かれていた学生の感想からは、「自分のパートナーの紹介がうまくできた。」逆に「うまく紹介してあげることができなくて申し訳なかった。」といった感想や、「自分のグループが紹介するときにメンバーにきちんと聞いてほしいので、自分が聞く側になったときもしっかりと聞こうと思った。」さらには「1年間同じクラスにいて知っているつもりだったクラスメートにも、まだまだ知らないことがあったことに驚いた。」といった感想を見ることができた。また、社会福祉援助技術という科目に対して難しそうな科目であるというイメージがあったが、今回の演習を行ったことで、そのイメージがなくなった。これから楽しく演習ができそうだ」という科目に関するイメージが変わったという意見も見られた。

はじめに述べたが、今回、保育士養成カリキュラムの改正で平成22年度入学生より、保育士の援助技術に関する科目の改正が行われ、社会福祉援助技術は相談援助と名称を変え、さらには保育相談支援という科目が誕生した。これにより、今まで社会福祉援助技術で行われていた教授内容も取捨選択を行いつつ発展させてゆく必要が出てくる。保育士養成課程で社会福祉援助技術の教授について考えた時、限られた時間の中で、いかに有用な内容をしっかりと学生に伝えていくことができるか、教材研究と同時に指導者の技術も問われるだろう。援助技術関連の科目については試行錯誤を繰り返しながらの授業の組み立てとなっていくと思われるが、今回の取り組みを参考にし、導入から終了までの授業運営の方法を検討していきたいと考えている。

参考資料

- ・2011佐賀女子短期大学 講義概要と授業計画（2年生用）
- ・吉田眞理『生活事例からはじめる社会福祉』青踏社2011
- ・厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課保育係第6回保育士養成課程等検討会 議事要旨（2010）
- ・厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課保育士養成課程等検討会中間まとめ（2010）

